



ゆう科学通信

Vol.16

NOV.

11月

2015年11月13日発行

発行: 八雲志人館

〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail/shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な
地域を創出することをめざして活動します。



熊野大社拝殿と本殿

◆熊野大社
たしかに「クマ」は、古語でも「樹木が鬱蒼としたところ」、あるいは「隅（くま）すみ」の意で、辺境の地を意味します。しかし、当社の由緯略記に、「神が鎮まるのにふさわしい処を『熊』と名づけて聖地とみなす」、「神ニクマニカミアリ」とあります。

水の豊かなこの「奥地」こそが、実は古代出雲の首都・意宇郡（おうのこおり）のはるか太古にさかのぼる発祥地だったのではないか。蛇（ヤマタノオロチ）退治の神話で知られるスサノオノミコトです。この神には、「神祖熊野大神櫛御氣野命」という別名があります。「神祖」はカブロギと読み、神聖な祖神の意であり、実際の神名は「櫛ノミコト」です。

「風土記」では、意宇川の源流は熊野山（現在の天狗山）とされ、その山頂付近に「大社が鎮座」とあります。また『日本書記』に、659年、「出雲国造に命じて嚴（おごそ）かな神の宮



ハートの石

◆琴板発掘
「鑽火祭」の終わりに、出雲大社の宮司が、榦の小枝を取つて大きく輪を描く動作を百回繰り返す「百番の舞」を舞います。神々の恩恵によつて農作物が豊作であつたことに対する喜びを、神に表現する儀礼だといいます。このとき、熊野大社の社人は「琴板」という、弦のない古代の琴を打ち鳴らしながら神樂歌を歌います。

「百番の舞」は、出雲大社や神魂（かもす）神社で行われる「古伝新嘗祭」でも舞われます。その際にも、やはり「琴板」が鳴らされます。その様子が、熊野大社境内にある休憩所「環翠亭」に掲げられた絵に描かれています。

また、出雲大社宮司の代替わりの際の「火繼式（ひつきしき）」でも、熊野大社で起こした火が用いられます。この「神火」で調理した食べ物を食べることによりアメノホヒに生まれ変わり、初めて出雲国造になるときとされています。「火」は「靈（ひ）」とみなされ、火繼式は「靈」を継ぐ儀式なのです。

「百番の舞」は、出雲大社や神魂（かもす）神社で行われる「古伝新嘗祭」でも舞われます。その際にも、やはり「琴板」が鳴らされます。その様子が、熊野大社境内にある休憩所「環翠亭」に掲げられた絵に描かれています。

「百番の舞」は、出雲大社や神魂（かもす）神社で行われる「古伝新嘗祭」でも舞われます。その際にも、やはり「琴板」が鳴らされます。その様子が、熊野大社境内にある休憩所「環翠亭」に掲げられた絵に描かれています。

「悠久の河」意宇川紀行⑤

松江市八雲町の南の奥、意宇川の源となる山麓に「出雲国一の宮」熊野大社があります。周藤彌兵衛翁が開削した切り通しから、車で15分ほど川をさかのぼったところです。8世纪にまとめられた『出雲國風土記』で「大社」と表記されているのは、杵築（きづき）大社（1871年・明治4年より出雲大社に改称）と当社の2社のみで、いすれも出雲国造（こくそう）がお祭りしてきた神社です。なぜ、これほど格式高い神社が、こんな奥地に鎮座しているのだろう、と不思議に思われます。が、「奥」というのは、今の私たちの感覚だからかもしれません。

平安時代以降から江戸時代までは、現在の熊野大社から400mほど上流に「上（かみ）の宮」があり、当時は、熊野大社のことを「下（しも）の宮」といつたそうです。

「百番の舞」は、出雲大社や神魂（かもす）神社で行われる「古伝新嘗祭」でも舞われます。その際にも、やはり「琴板」が鳴らされます。その様子が、熊野大社境内にある休憩所「環翠亭」に掲げられた絵に描かれています。

また、出雲大社宮司の代替わりの際の「火繼式（ひつきしき）」でも、熊野大社で起こした火が用いられます。この「神火」で調理した食べ物を食べることによりアメノホヒに生まれ変わり、初めて出雲国造になるときとされています。「火」は「靈（ひ）」とみなされ、火繼式は「靈」を継ぐ儀式なのです。

「百番の舞」は、出雲大社や神魂（かもす）神社で行われる「古伝新嘗祭」でも舞われます。その際にも、やはり「琴板」が鳴らされます。その様子が、熊野大社境内にある休憩所「環翠亭」に掲げられた絵に描かれています。



御笠山の巨岩



鑽火殿

◆後記
「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を確に発信しています。
お投稿はメール、ファックスで

(交易場修)

前田遺跡は埋め戻され、今は国道の下に眠っていますが、付近を歩くと、地の底から今にも「アン！ アン！」「オン！」「オン！」という音色が聞こえてきそうです。

出雲大社で、これを聞いたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、こう書いています。「ふたりの神官が、その箱を床上におき、その両側に坐つて、小さな棒を手にもつて、箱のふたをたきはじめた：たたくと同時に、まことに何とも奇妙きてれつな、单调な音が鳴りました。ひとりの神官がたたくとひびく。もうひとりの神官がたたくと、これは『オン！ オン！』と答える。琴板は、たたき棒がその上に落ちるたんびに、『アン！ アン！』『オン！ オン！ オン！』と、しづかな、はつきりした、洞々（とうと



環翠亭の琴演奏の絵

◆琴板発掘

「古事記」に、根堅州国（ねのいく根源の国）に行つたオオクニヌシが、スセリヒメの父神・スサノオの元から逃げ出す時に持ち出した宝物「天の詔琴（あまののりごと）」が、樹に触れて大音響を立てさせた」とあり、これが山麓にいる熊野大社社殿の始まりともいわれています。

平安時代以降から江戸時代までは、現在の熊野大社から400mほど上流に「上（かみ）の宮」があり、当時は、熊野大社のこと

を建てさせた」とあり、これが山麓にいる熊野大社社殿の始まりともいわれています。

平安時代以降から江戸時代までは、現在の熊野大社から400mほど上流に「上（かみ）の宮」があり、当時は、熊野大社のこと